

ハンセン病療養所の森

The woods in Tama-Zenshoen as the National Sanatorium for Hansen's disease

柴田 隆行
Takayuki SHIBATA

はじめに

「私たちが地上を去る時、センターと森が残るであろう。」

東京都東村山市にある国立療養所多磨全生園患者自治会長松本馨氏は、1979年発行の『俱会一処——患者が綴る全生園の七十年』でこう語っている。センターとは、ここにハンセン病治療の国際センターをつくる構想を指す。森は、園内に育つ3万本を越す木々を指す。「私たちが地上を去る時」という松本氏の言葉には、ハンセン病患者の過酷な歴史と、療養所で生きてきた人たちの深い思いが込められている。

多磨全生園の前身である第一区連合府県立全生病院が開設されたのは1909年9月28日で、そのために10万1154㎡の林野が開墾された。土地の人から「お山の監獄」と呼ばれた。記紀時代に遡るハンセン病者に対する社会的偏見・差別が国家権力によって強化徹底されたのは、1907年3月制定の「癩予防ニ関スル件」および1931年4月制定の「癩予防法」によるものであり、さらには戦後の1953年8月に制定された「らい予防法」によるものである。これによって、退所なしの隔離、断種・墮胎、労働・奉仕などがハンセン病患者・入所者に強制された。自然治癒すべき軽症者や治癒者も含め多くの患者が劣悪な体制と過酷な労働によって病気を再発させたり病状を悪化させたり、あるいは他のさまざまな病気やけがを併発させたりした。退所規定のない強制隔離により将来の希望が断たれ自殺した者も少なくない。「民族浄化」の名のもとに、サーベルを下げた警察官による強制連行や貨物車による患者輸送、これ見よがしの消毒等によりハンセン病への強度の恐怖心と偏見・差別を煽られた近隣住民ならびに国民一般によって患者家族への差別が激化し、21世紀のこんにちでも本名を名乗れず、治癒しても故郷や実家に帰れない人がいる。1996年4月にらい予防法が廃止され、さらに国の行政責任を認めた国家賠償請求訴訟で原告が全面勝訴し、政府も公式に謝罪したいまでもその状況に変わりなく、ハンセン病に対する社会の偏見がいまだに根強く残っていることは、2003年11月の熊本県黒川温泉宿泊拒否事件後に療養所自治会に寄せられた大量の差別文書で明らかである。

日本におけるハンセン病の歴史をたどるとそれだけで数冊の書物を要するが、ここでは全生園の森に焦点を絞り、森を育てた入所者の意識を瞥見するに留める。第1節では、年表形式でこの森の歴史をたどることとする。全生園入所者自治会は東村山市とともに数年前から「人権の森構想」を提唱し運動を展開しているが、森についてのまとまった資料はまだ存在しないので少し詳しく記したい。第2節では、入所者や看護師からの聞き取りを中心に、入所者の森への思いを取り上げる。第3節ではこうした活動の意味を考察する。

第1節 森の歴史

1909年10万㎡強の土地に開設された全生病院は、患者・入所者の増大により、1922年に東南に隣接する山林畑地67281㎡を買収、さらに翌23年に東側山林15418㎡、31年に病院北側山林31315㎡、37年に同隣接山林31133㎡、38年に西北方山林33080㎡を次々に買収し、その規模を拡大していった。(入所者は、全生病院開設時は238名であったが、1937年に1200名となり、最大は1943年の1518名であった。これは発病者が増えたためではなく、国策による「患者狩り、無癩県運動等」による増加である。同時に、劣悪な生活環境と強制労働により、年間死亡者数は1942年の149名を最大に、戦中戦後は毎年100名を越え、それが20名以下になったのは1950年代以降である。なお、全生病院が国立癩療養所多磨全生園となったのは1941年7月1日である。)

強制隔離政策を最初から主唱し、戦後もなおその強化を求めた中心人物は医師の光田健輔氏である。光田氏は全生病院開設時から医長として病院の運営を指導し、1914年には療養所長兼院長に就任、31年3月に全生病院患者81名を「開拓」のため引き連れて長島愛生園に転任するまで、ここでみずからの絶対隔離思想を貫徹した。その表れのひとつが、幅3.6m深さ2.7mの入院者地区を囲む堀割と、掘り上げた土を盛った土堤であった。土堤の出入りしやすい場所には棘のあるカラタチの木が植えられ、職員地帯との境界には有刺鉄線が張り巡らされた。逃亡した者は監房に入れられた。大正末から昭和の初め、光田院長は逃亡防止と作業簡易化のため堀を掘らずに柵を植えることを思いつく。1960年頃には「背丈は伸びるにまかせ、幹は太く、枝は複雑にからみ合い、葉は隙間なく繁った」(『俱会一処』p.218)という状況であった。外からは中が見えず、何者が住んでいるかと不思議に思われ近隣住民から恐れられた。その陰湿な印象は北条民雄の『いのちの初夜』で強烈に描かれ、国民の間に強い恐怖感を植えつける結果となった。他の園でも同様で、周囲を海に囲まれた島や断崖絶壁に阻まれた山奥の療養所は別として、平地では柵やカラタチのほか刑務所を思わせる高いコンクリート塀で囲まれた。全生園の柵の垣根がいまの高さに切り下げられたのは、1960年1月に起きた園内殺人事件以後である。(生け垣の柵は、『緑のしおり』に1249株とその数が記されている。)

1922年に近隣の雑木林を買収して土地を拡幅したあと、患者たちは汗と泥にまみれ手足に血を滲ませながらそこを農地に開墾したが、その際に出た根株と、患者地区を囲む堀割を掘った残土を園内に盛り上げてつくられたのが築山であり、そこに登ると、垣根の向こうに富士山や秩父の山並み、あるいは村人が荷車を引いたり畑仕事をしたりしているのが見えたという。また、二度と帰ることの許されない遠く遙かな故郷を思う場所ともなり、誰言うとなく築山は「望郷の丘」と呼ばれた。

1934年3月24日、寮舎北側に防風林として竹が植えられた。竹は、食用ならびに竹細工のために戦後も園内各所で植えられたほか、盲人の杖にも加工された。

1936年3月25日、依託療養中の外島療友70名より、在院記念に吉野桜苗木200本が寄贈され、神社外苑に植えられた。(連合府県立外島保養院は大阪湾に隣接するゼロメートル地帯に設立されたため、1934年の室戸台風による高波に吞まれ187名の犠牲者を出して潰滅、入所者は代替施設となる邑久光明園が長島西端に創られるまで各地の療養所で療養した。なお、この桜のほとんどが戦中戦後の生活困難期に伐採され、いまはない。)

1940年、皇紀2600年の記念事業として園内42974㎡を公園として造成(永代神社、野球場、楓公園一帯)、同年10月16日檜苗2600本を園周囲に植樹した。(この檜の一部は現在、東門から国立感染症研究所の街道沿いに並木として残されている。)

しかし、園内の多くの樹木が戦中戦後の困難な時期に汽缶場用ないし棺桶用材として伐採された。1943年7月26日防空待避壕用材として園内の樹木を伐採(一帯は平地のため防空壕は露天掘りで、壕の天井に伐採した樹木を覆いとして並べた)。他方で、1944年11月7日警防団により園周囲に檜苗300本が植えられたとか、45年3月25日檜苗を各舎に4本ずつ配給したという記録もある。また、らい予防法が1996年に廃止されたあとも「ハンセン病患者は、らい菌保菌者ではあっても、らい菌そのものではない。健常人と同じく、家族を持ち、仕事を持ち、将来への希望を持ち、人間としての誇りを備えた人間社会の一員である。らい菌による病から救護されるべき存在ではあっても、らい菌と一緒に〈根絶〉させられるべき存在ではない」(1999年3月26日付東京地方裁判所宛「らい予防法人権侵害・国家賠償請求事件」訴状)と訴えなければならぬほど人権が否定されていた療養所という名の「収容所」では、予算削減によって、戦中戦後の一般社会の窮乏よりはるかに厳しい生き残りぎりの生活が強いられていたため、グラウンドや果樹園等を畑にしたのは言うまでもなく、隔離の象徴である「柵についた青虫まで食べた」(所義治氏談)状況で、入所者による園内樹木の盗伐が繰り返され、「1947年1月10日園外雑木林の樹木及び落葉の盗害につき地主より抗議される」という事件も相次いだ。

以上は全生園の森の前史であり、これからが本史である。

1948年3月8日、新規約による全生会役員選挙で選ばれた土田義雄執行部のもと、緑化委員会が設置され、山桜100本、吉野桜100本、しだれ桜100本、彼岸桜50本、八重桜50本、三ツ葉楓20本、榎50本が園内に植樹された。1956年3月18日、栗苗80本を納骨堂周辺に植樹。それとともに1956年度植樹計画として吉野桜100本、梅10本の購入が決定された。1957年3月5日、園の南面の柵垣沿いの檜35本を、バス道路拡幅に伴い永代神社裏その他へ移植。1959年3月、日本聖公会宣教百年記念植樹としてメタセコイア1本が日本聖公会礼拝所に植えられた。(退所規定のないハンセン病療養所では、入所と同時に自分の宗教—全生園では日本聖公会、カトリック、プロテスタント、浄土真宗、真言宗、日蓮宗—を選択するよう強いられた。快癒退院ではなく葬儀が先決であった。死んでも故郷に帰れない者がほとんどであるため、園内に納骨堂があり、また、精神的な慰安も込めて宗教施設があった。) 聖公会礼拝所内には、沖縄2園5教会代表が本土訪問記念として1971年4月11日に植

樹したメタセコイアも大きく育っている。

1959年4月10日、東京都より杉苗100本、檜苗200本、ポプラ苗350本、また、愛知県より桜苗300本が寄贈され、神社裏とグラウンド北側に植えられた。同年6月23日、福島県よりタイサンボク5本が寄贈される(第一面会者宿泊所南側と自治会館北側に現存)。1960年11月24日、愛知県人会の斡旋により藤楓協会愛知県支部より栗苗200本が寄贈され、火葬場前の空地等に植樹。こうした動きはその後も続き、1983年には、自治会緑化委員会の呼びかけで「県木の森」運動が展開され、各都道府県から県木が送られた。たとえば、1984年3月27日に秋田県庁職員が秋田杉3本を持参、北海道庁職員もエゾ松3本を持参、いずれも研究所西側に植樹。同年6月までに42都道府県の木が寄せられた。青森県：ヒバ、栃木県：トチノキ、千葉県：イヌマキ、長野県：シラカバ、岐阜県：イチイ、愛知県：ハナノキ、兵庫県・佐賀県・熊本県：クスノキ、和歌山県：ウバメガシ、徳島県：ヤマモモ、宮崎県：フェニックス、などなど。これらの木はおもに矢嶋公園から西側に植えられた。しかし、当地の気候風土に合わず枯れ死する木もあり、また、珍しい木が盗まれることもしばしばあった。

1964年9月25日、台風20号来襲、納骨堂前のアカシアが倒れるなど立木の被害多発。

1971年3月10日、患者自治会に設置された緑化委員会は、5万円の予算を計上し、全部で16000本300種(桜180本、欒100本、杉130本、コブシ50本、檜1300本、松400本、ツツジ550本、梅70本、柿その他の若木)の植樹を開始した。委員長は山下十郎氏であった。山下氏は、みずからの年金や軍人恩給等の私財を園内の緑化に投じ、また所義治氏、萩野隆夫氏とともに、生涯を緑化運動に捧げた。1982年12月13日、寮舎整備により日照の問題が生じ、御歌碑近くの株立モミジを伐採するか否かと関係者を悩ませたとき、費用50万円を寄付して移植し伐採をまぬがれさせたのも山下十郎氏であった。

1909年の全生病院設置に対する激しい反対運動から始まり、バスやタクシーの乗車拒否、物品の売買お断り等々さまざまな差別を受けてきた入所者と地元住民との関係であったが、柵の垣根が低くされた1960年以後少しずつ園内外の交流が始まった。とくに4月のお花見の季節には、外から大勢の市民が桜見物に訪れた。1973年「特別作業で八千代通りに面した畑をつぶし、芝種子を蒔き、桜並木を芯に公園のようにした」結果、「ベンチが外からの人たちに使われていることが多く、気のいい不自由寮のおばあちゃんなど、遠くから眺めただけで帰ってゆく」という皮肉な事態も生じるようになった(大竹章『無菌地帯』p.457)。(筆者が、筑波大学院生坂田勝彦氏と共同で行った調査によれば、2006年4月1日10時から15時にお花見で園内を訪れた人は2976名であった。)

1973年11月発行の『東村山市樹木・樹林調査実態報告書』により、当時の全生園の森の実態を見ておきたい。全生園のある青葉東地区の樹林面積は17,2700㎡で、全体の24.7%、1km²辺りの樹木52本すべてが全生園内にある(松24本、欒4本、イチヨウ9本、桜1本、サワラ5本、その他9本)。直径50cm以上の樹木は373本、うち欒232本、松60本。樹林内の大樹は松13本、イチヨウ5本、サワラ1本、その他2本、計21本で、太さ別では50～65cmが46本、70～85cmが5本、90cm以上が1本である。

1) 全生園敷地内西端。樹林面積1,6450㎡、直径50cm以上の樹木数8600。優先樹種小檜、エゴ。

林内に建物が点在。

2) 全生園入口近く。樹林面積3250㎡、樹木数90。優先樹種松。松の大木が多い。

3) 全生園敷地内北部。東はグラウンド。庭園風につくられ散歩道があり、芝生が多い。樹林面積6600㎡、樹木数1100、優先樹種樺、松、欒。樹木、下草ともに疎生。

4) 全生園敷地内北部。おもに永代神社境内。西はグラウンド。樹林面積6850㎡、樹木数800、優先樹種松、檜。樹木、下草とも密生。檜は植林のものでまだ小さい。

5) 全生園敷地内北部。東は全生園の畑、北には広大な樹林が数箇所ある。管理不良。樹林面積4350㎡、樹木数1200、優先樹種小檜、エゴ。竹が混在。プラタナスの大木(直径50cm未満)あり。隣接して牛舎がある。

6) 全生園敷地内東端。手入れがよく行き届いている。樹林面積9150㎡、樹木数600、優先樹種イチヨウ、松。樹木、下草とも疎生。中心に「全生者の墓」あり。

7) 全生園敷地内最南端。管理不良。水槽、焼却炉、ゴミ捨て場、資材置き場あり。樹林面積7950㎡。樹木数800、優先樹種小檜。

8) 全生園敷地内北西部。周囲に全生園の建物が散在。北から西にかけて樹林。樹林面積3500㎡、樹木数300、優先樹種松。松の大木が散在。

1977年7月5日、皇太子・美智子妃夫妻来園、新井公園の歌碑の前に楓の苗木を記念植樹。天皇皇后になったあとの1991年3月4日に再来園。この来園を記念し、91年4月8日に緑化委員会はハナミズキの苗木2本を本館東側に植えた。

1980年5月16日、千寿池完成。空堀川に捨てていた、浄化槽で濾過した水を転用した池でフナを放流、入所者が釣りを楽しんだ。その後、危険だとか水の無駄遣いだといった声上がり、現在は埋められて存在しない。

1981年11月に国本衛氏が自治会の環境衛生部長に就任し、緑化委員長を兼務するようになって、園内の緑化活動はさらに活発に、そして計画的に進められるようになった。1982年4月4～5日、中央通り沿いに一人一本運動(1本1口5000円)のツバキとサザンカの苗木が一斉に植えられた。第一次申込みは73口であった。1983年3月31日に第二次植樹が行われ、第125番まで植えられた(最終的に181人が申込んだ)。一本一本に申込者の名前が記された名札が掛けられた。苗木は現在3mほどに成長している。偏見・差別による複雑な家族関係等が理由でいっさいの遺品も残さず亡くなった方の唯一の形見がこのツバキやサザンカとなった。ポット苗という独自の方法を発案した宮脇昭横浜国立大学教授の助言を得て植樹はさらに加速。宮脇教授によると、常緑広葉樹は根がまっすぐに伸びるため、ふつうの苗木では移植の際に根を切らざるをえないが、どんぐりからビニール容器で育てると根や葉を傷めず移植できるため成長が速く、樹形も自然になるという。その成果はすでにホンダ狭山工場や小平のブリジストン工場などで実証済みであった。1983年4月21日4000本のポット苗(アラカシ、シラカシ、ヒサカキ、トベラ、サンゴジュ、ネズミモチ、ツクバネ、ヤブツバキ、クロガネモチ)が入所者と職員有志約250人の参加により、南側垣根沿いと、納骨堂を経て矢嶋公園にかけて植えられた。とくに南側は、かつて鶏舎があったところなので成長が速かったという。

1986年4月1日、緑化委員会が作成した園内樹木一覧によれば、竹を別にして252種類の樹木があった。樹齢30年以上の大木は、楓120本、イイギリ5本、欒100本、櫟750本、樫37本、椎21本、桜157本、檜220本、梅150本、ヒマラヤ杉12本、三つ葉楓27本、ポプラ20本、樹齢70年以上の松400本。

1984年10月31日NHKテレビ朝のニュースワイド、1986年6月15日テレビ東京「緑のびのび 全生園の森づくり」などで全生園の森が紹介され、1987年5月17日には東村山市内の野鳥の会主催のバードウォッチングが一般市民や第七中学校生徒ならびに緑化委員などが参加して行われた。同年11月1日第一回東村山・緑と友情・車いすミニマラソン開催、1989年3月10日3年間草取りや巣箱架け等に通った市立第五中学校ボランティア生徒20人が櫻の丘で卒業記念の植樹、同年5月13日市内中央緑地公園で東京都主催のグリーンフェスティバル'89開催など、市民と合同の行事も毎年催されることになった。このような動きに呼応して、入所者自治会は1989年9月25日にパンフレット「緑のしおり」を発行し、日ごろの緑化活動とそこで育てられた木々を写真と地図で紹介した。このパンフレットは好評を博し、1992年5月8日と1994年10月20日に各1万部が増刷され市民に配布された。市民との交流は現在も続き、1990年6月10日杜の会共同作業所が西梅林でチャリティ梅もぎ開催、市民60人が参加。1991年11月3日に第1回東村山秋の緑の祭典が全生園を会場として開かれ、2005年には第13回目を迎えた。この動きは市政にも反映された。1992年5月5日、東村山市みどりを守る市民協議会会長らが入所者自治会長および緑化委員と懇談。1993年11月23日、東村山市緑を守る市民協議会・市民の会150人が来園。1998年10月15日、東村山市より「東村山市のみどりの基本計画策定について」が提示され、同28日市職員6人と市民22人が来園。1999年1月28日、東村山緑を守る協議会第一回役員会で10周年記念行事として東京都と厚生省へ全生園の緑を保全する要請書を提出することを決定、2000年に東村山市議会は国に対し全生園の森の保全を守る意見書を提出。このころより、全生園の将来像として入所者自治会は、「人権の森」構想を提唱し、老朽化した施設の修復と保存への協力を市当局や市民に呼びかけた。2002年10月15日東村山市長と市議会議長が厚生労働省を訪問し、市内にある全生園の史跡建造物を保存する「ハンセン病記念公園人権の森」構想について国の支援を求める要望書を大臣に提出。こうして、2003年11月17日山吹舎が落成、さらに2004年8月22日には「望郷の丘」も修復された。

入所者自治会緑化委員会では、このほか園の内外10箇所にて二酸化窒素の調査を1989年6月から始め、1991年6月、1994年6月、1995年6月と12月、2000年6月と12月、2005年6月と継続的に調査を続けている。2005年11月3日に中間報告としてパンフレット『みどりのオアシス全生園』を発行、「緑のおかげで環境基準を保つものとしてよい結果が出た」と報告している。

第2節 森への思い

「東京から所沢街道を西北に進み、下里部落を出ると先ず目につくのは全生園の松林であった。緑の雑木林に断然群を抜いて大空に聳える老松は逞しい枝を交えて武蔵野の地を覆うかのように生え繁っていたものだ。おそらく北多摩地方にはこゝに勝る老松の群落はなかったと思う」と、職員だった二平利一郎さんは戦前の全生園の様子を描いている（『全生園と松林』『多磨』1969年3月）。いま

とは違い、まわりは雑木林ばかりだった。「栗の木がたくさんあって、子どものときよく採りに行った。ちょっと行ってバケツいっぱいになった」と入所者の山下道輔さんは振り返る。入所者はこの雑木林を「山」と呼ぶ。空堀川からわずかに高台になっているところから、古くから地元でそう呼ばれていたようであるが、樹木が鬱蒼と茂って山のようにであったことは事実である。そのような自然環境の地である全生園で、入所者があえて森づくりに励んだ理由のひとつに、戦中戦後の大量の樹木伐採がある。1950年代の写真では全生園が「山」と呼ばれたとはとても思えない。風が強い日には砂埃がひどく「縁側でジャガイモが植わるって言われた。板のうえに砂が溜まるとジャリジャリという音がして、気持ちが悪かった」という萩野芳江さんの証言や、「ガラス戸などない時代だから、砂埃がひどい日は雨戸を閉めて暗い室内でみんなじっとしていた」という山下道輔さんの証言があるように、園内の樹木の多くが伐採され砂塵を巻き上げていたのである。

荒川武甲さんは戦中戦後の状況をこう振り返る。「燃料がないから、食糧を買い出しに行ってもそれを煮炊きすることができない。園内のめぼしい木は切ったので、夜中に垣根の竹を抜いてたきぎにしたこともあった。共同で暮らしていますから、自分だけ良い子になっているわけにはいかなから、私もずいぶん伐った。」樅や檜のひこばえも伐ったために雑木林の再生もならなかった。「私は毎日この柵の、箸より細い枯枝を集めては自用にあてた。方30センチの箱一杯集めれば一合の米、一碗の芋を煮炊きするには充分だった。女もせぬような、こんなみみっつい真似をなぜしたのか、それは他の患者のように園内外の樹を盗伐するだけの度胸も力も私には無かったからで、決して私の倫理性の故ではなかった」と芳葉郁郎さんは書いている（『落葉挽歌』『多磨』1970年11月）。

〔昭和19年〕12月に入ると庭木を切り、防空壕に掩蓋を施すことになった。石炭の入荷も止まり、薪で汽関場のボイラーを熱することになった。また棺桶さえ不足し、あわてて園内の松の木を切り倒し、板にして使うことになった。／いくら寒くても、室内で焚く木炭はもちろん、茶を沸かす薪さえ配給には頼れなくなっていたが、空襲警報が発令されると、病棟入室者はさらにみじめであった。／夜になるとみんな木を切りにいった。各舎が搜索されるようになると、盗伐した木を朝までに切りきざみ、束にして押し入れや縁の下にかくした。（『俱会一処』p.162-164）盗伐して職員に捕まった者は監房に入れられた。松木信さんはつぎのように書いている。

男子独身不自由舎の付添夫が、燃料が無くて病人にお茶を飲ませることができず、路傍のプラタナスの枝を切って、それでお茶を飲ませたが、園長に、国の財産である木の枝を無断で切ったという理由で、監房に入れられたのであった。五人の病人と一人の付添夫よりも、国の財産であるプラタナス一枝のほうが貴重だったのである。この事件は私の脳裏に焼き付いて離れなかった。わが国のらい対策を、このプラタナスの一枝が象徴していたからである。（『生まれたのは何のために』p.86）

こうした戦中戦後の生活からようやく抜け出すことができるとすぐに緑化活動が始まった。「平和な時代を迎えるとすぐ、そして今日まで、入所者と自治会はいつも、緑化に力を入れてきましたし、それは、かつての苦しさを忘れず、戦争はごめんだ、平和を守ろう、という思いをこめて、といてよいでしょう」（入所者自治会『緑のしおり』）。1948年4月全国植樹愛林記念週間に呼応して全生

園でも園内緑化デーが催された。林芳信園長は園内放送で、「戦時中より終戦後の今日に至るまでの永年の燃料不足のため次ぎ次ぎに伐採し、或は炭として或は薪として一般に配給使用し、殊に石炭の入荷しなかった時には石炭の代りに相当多量に蒸汽機関に使用し、或は又直接炊事用にも使用したのでありますが、又一面には之等の園当局の計画的伐採以外に無断で勝手に伐採されたものも相当の数量に上ると思ひます。〔中略〕本園も愈々再建の巨歩をふみ出した感が致します。園当局と致しても全面的にこれを支援し、出来る丈苗木の購入も致す考へであります」と述べている。生きるために盗伐せざるをえない状況下、園長名で監房に入れられた多くの入所者の気持ちなど無視するかのような、すべては戦争による非常事態の自然の成り行きだと聞こえる演説である。全生園を「大きな一つの植物園化して樹名、植樹年月日、樹歴等を明記し名実共に第二、第三の故郷として永住し悲しい時にも楽しい時にも唯一つの慰めは情緒豊かな自然の柔か身であり父であり母と成りして呉れるので有ます。私達は心の友として愛育し、その自然の懐に抱かれ生活して行きたい事は御相互ひの希望であり、理想郷たらしめたい」という夢が入所者代表の土田義雄全生会会長から語られるのにはそれなりの意味があるとしても、療養所を楽園にしたいという園長の同様の言葉には強制隔離政策が透けて見える。記録によれば（『山桜』1948年4/5月）、緑化資金を提供したのは、日蓮宗870円、功労者200円、互助会1000円、愛友会400円、聖公会100円、赤ろ会300円、秋津教会500円、篤志家870円、在園者一同1万円であった。園当局が支出した記録はここにはない。この資金によりアカシヤ200本、楓86本、三つ葉楓20本、吉野桜100本、八重桜80本、彼岸桜20本、ヒマラヤ杉20本、樅50本、洋石楠花20本など計590本が植えられた。

果樹も多く植えられた。梅や栗、柿などのほか、榎も実を採るために植えられた。個人が植えたものも多い。荒川武甲さんによると、かつて木の種類はあまりなかったが、個人がふるさとにあった木を懐かしさで植えることも多いという。「子どもの時に遊んだ木とかふるさとから持ってきてもらった木とか。私の場合は自分が種を蒔いたクスノキやメタセコイアやユリノキなど。矢嶋公園のところにある県木のなかに白ムクゲがあるでしょう、あれは私にとって懐かしくて。うちの庭にあったからです。植物が好きだったので、あちこちからカタログを取り寄せて木を購入したり種を蒔いたりした。そのころに植えた木がいま大きくなって、ときどき会いに行きます」（荒川武甲さん）。「伽羅の木があるでしょう。あれは私が育てていたのをあげたのです。盲人会の所にあるヒメタイサンボクも、私が挿し木して盆栽にしていたのを植えました」（児島宗子さん）。

全生園の緑化が徐々に進む中で、自治会の環境衛生部長に就任した国本衛さんは、計画性を持った緑化活動をしなければだめだと考え、みずから樹木を調べ、「従来は苗木を植えたけれども、大きな木を植えてそれを育て、みんな年をとってきたから、生きているあいだに森らしい森を見られるように」と計画し、第一回緑化委員会でつぎのように説いた。

全生園の森を地域住民に残すというだけでは、現実性に欠けるものがある。もう一つ考えねばならないことは、「ふるさとの森づくり」ということだ。わたしたちは帰るべきふるさとながない。ふるさとを奪われたからだ。そこでわたしたちは、ふるさとへ戻りたくとも戻れない者たちのために「ふるさとの森づくり」を考えなければいけない。（国本衛『生きて、ふたたび』p.189）

こうして、「県木の森」や「一人一木運動」「森林浴道」「ポット苗植樹」などの活動が、入所者、職員、ときに市民を交えて次々と展開された。「一人一木運動には、私も主人と一緒に参加して植えました。サザンカだと思います。植えたときには丈が50センチぐらいしかなかったのですが、いまはずいぶん大きくなりました。主人は樹木が好きでした」と茂田美津枝さんは、亡くなられたご主人を偲びながら思い出を語られた。長谷川と志さんは「亡き夫の献木したりし山茶花の白花ひと目見せたきものを」と歌っている（『合同歌集 青葉の森』武蔵野短歌会、1985年）。看護師Aさんは「私もそこを通るときに、亡くなった方がたくさんいらっしゃるけれど、お名前を見て懐かしいなどと、その患者さんに、あなたが植えた木はちゃんと立派に育っているわよと、気持ちで話しかけることがあります。眼が見えない患者さんには、そういうところを通るときに声をかけてあげて、あなたの名前がついている木はいまこういうふうには育っていますよ、山茶花が花をつけていますよ、すすく育っていますよって、声をかけるようにしています」と語っている。入所者の宮田正夫さんは、「私も全生園の森作りに協力して、椿を一本私の名前で植えてもらった。思えば遠いふるさとのわが家の裏山に数本の椿があった。その赤い椿の花に口づけて蜜をすうめじろの愛らしい姿が一幅の絵となって臉に浮かんでくる。それと同時に幼い私を溺愛した祖母の笑顔がうかんでくる」と著書に書いている。また、大竹章さんは「鳥たちの楽園が人間の楽園でないはずがなく、薬やお医者さんばかりに頼らず、もう少し散歩をしたり、森林浴を楽しんで貰おう、と緑化委員会では、差し当たって藁寮前から納骨堂までの林のなかに遊歩道を設けることにした」と記している（『写真風土記 141 森林浴歩道』『多磨』1984年6月）。看護師Bさんによれば、目の不自由な方は、建物の変化に関しても木を目印にしてイメージをふくらませているようだという。「耳で聞こえる鳥の声やセミやコオロギなどの昆虫の声を楽しんでいるようです。しかし、葉を撒いているせいか、最近は随分と鳥や昆虫が減ったと言いますし、私もそう感じます」と付言している。豊かになった園内の自然は入所者を和ませ、短歌や俳句などで数多く歌われた。（紙数の関係でこの点については別稿に譲らざるを得ない。）

全生園が所在する東村山市内の小中学校では、さまざまな機会にハンセン病や全生園の森を教材として取り上げている。たとえば、らい予防法廃止より10年も前に東村山第五中学校で行った学習記録に生徒の感想が載っているが、当時の状況がよくわかる。

「僕は、始めはただの森でみんなが遊びにくる所だと思っていました。が、聞いた所、今じゃ、さほど恐ろしくない病気ですが、昔、苦勞した病だと聞きました。母も、その事は教えてくれませんでした。あまりまわりへ行くなと言われていました。でも、そんな事は、ひとかけらも見当りません。平和なかんじがして、緑いっぱいあって恐い感じなどぜんぜんしません。自動車やバイクの雑音や排気ガスに囲まれている方がいつどうなるか心配です。」「僕は前に友達から『全生園に入ると、顔がとける。』と言われたので恐かったけれど、今では平気になりました。木や草花がいっぱい咲いていて、前よりも気持ちがいよ所です。木や草花があるから気持ちがいよのだと思います。」「私は今まで、全生園という療養所があるということも、その中で入園者の方々が、`森をつくろう！、という取り組みをしているということも知りませんでした。」「ぼくはこのしお

りを読むまで、全生園はずかで、人なんかすんでないような気がしていました。」(杉野正雄編「みどりのゆび」『多磨』1986年4月)

こうして入所者や近隣住民に親しまれるようになった全生園の森であるが、問題がないわけではない。それは、地下水が浅くなって直根の樗や杉や檜の枝が上がらなくなった(所義治さん)とか、「松食い虫が一時期猛威を極めた時期があって、そのときにだいぶ駄目になりました。神社のうしろにあるのが一番まとまって残っているぐらいで、ほかのところにもそれぐらいの密度であったと思うのですが、ほとんど枯れました」(大竹章さん)といった自然現象だけではなく、隔離政策が緩和され園外の人が入り出すようになってから起きた問題は深刻であった。「築山は子どもたちが上から滑り降りて崩してしまった」(所さん)とか、魚を捕りに来た子どもが池に落ち親が文句を言ってきたということのほか、園内の樹木、さらには入所者が植えた庭木が盗まれる事件がしばしば起きるようになった。「この道はずっと夫がツバキを植えました。ツバキ通りと言います。五色咲きという種類なども植えて、写真を撮りに来る人や写生をする人などもいました。珍しい木だっていってみんな楽しみにしていた。でも、みんな持って行かれた」(萩野芳江さん)。ゴミの不法投棄も後を絶たない。「ここではゴミはまとめているから、捨てに来るのは近所の人ばかり。園でそれを焼却場で燃したら、こんどは燃えかすが飛んでくるって、文句を言いに来た」(萩野さん)。バス通り拡張で樗と樗の並木を切って欲しいという都からの要請があったり、近隣住民から日照権を盾に樹木の伐採が求められたり落ち葉が飛んでくるから何とかしろと言われてたりしている(自治会役員志田彊さん)。近隣住民との関係について所義治さんは、「みんな話がへたなんだね。自分だったら、子どもたちと一緒に森の中に入ってみなさいと説得するんだけど。こんなに緑が豊かなのは都会では最高のぜいたくなんだって」と言う。「夢がなければできないよ。神さまがいたら人間を見て何をやっているかと思うだろうね。これはノアの箱船と同じだ。近隣の人は落ち葉が落ちて困るというけれど、森林が果たす役割というのはあるのだから、パンフレットをつくって、近隣住民にここの自然の大切さを伝える必要がある。情けないね、直径1メートルぐらいの樗の木を切ってしまうというのだから。これは1億円出したってつくれない。」

園内部の問題、とりわけ入所者の高齢化による問題も生じている。庭で草木を育てるのを楽しみにしている人が多かったが、高齢化でそれも難しくなり、「庭に草が生えないようにカーペットを敷いている人がずいぶん出てきていますが、だんだんやれなくなってきているから仕方がないのかなと思います」(大竹章さん)。野鳥が来るのを楽しみにしていた鈴木禎一さんは、「明治神宮のようにきれいにしようという人が多くて、武蔵野の面影や樹木がなくなりました。野鳥や野草が棲める藪を残す必要があると何度も言ってきたけれど、ぜんぜん理解されなかった。見た目だけきれいにしようとして、下草をみんな刈ってしまって、野鳥がとても減ってしまいました。かつては60種類ぐらいいたのに、いまではその半分以下です。藪を刈って公園にしたら、来るのはカラスとハトだけになりました。藪を刈って葉を撒いて、野鳥も、コオロギやカブトムシなどもいなくなりました。前はこの近くにスズムシもいたのに、もういません。眼の見えない人たちの楽しみを奪ってしまったのです」と嘆いている。看護師Dさんは、かつて園内はもっとしっとりとした感じがあったと言う。

「緑化部で患者さんたちが仕事をしていると、センターの看護婦などがお茶だしをして、一緒にあれこれと世間話をしたりしました。そういう患者さんとの交流がありました。」それがいまはなくなったという。不自由者寮担当の看護師Bさんはさらにこう語っている。「短歌をつくる方が、以前は題材を拾うために自然に対する関心を強く持っていたようですが、いまは創作意欲も落ちて、短歌や俳句をつくっている方もほとんどいなくなりました。患者さんも自分から外に出て行くことはなくなりました。」

最後に、森に託した入所者の夢を再度確認しておきたい。長く自治会長を務め「人権の森構想」を推進した平沢保治さんは、「ハンセン病の歴史を考えたとき、この緑はいのちの森である。いのちの森とは人権の森、人権とは、私たちハンセン病だけ、われわれの権利がどうだとか生きられれば良いということではないのです。子どもたちが100円、50円と緑のお金を袋に入れて持ってきてくれます。全生園の森に使って欲しい、木を植えて欲しいと。これが21世紀の教育ではないかと考えています」とその意義を語っている。もっとも、「人権と言うからには、医療体制が整ってなくてまともな医療も受けられない中で人権問題としてきちんと話をもっていくというのならまだわかるけれども、森とドッキングさせて中和させてしまって何にもなくなっているではないか」という大竹章さんのような意見もある。森造りを計画的に推進した国本衛さんによれば、「人権の森」というのは後から出て来た話であって、もとは「ふるさと森」として承認されていたという。それは、生きているうちはもちろん死んでもみずからの故郷に帰れない入所者にとってここがふるさとだというだけではないと言う。

ここの市民というのはみんなよそから来た人たちですよ、みんなふるさとはどこかにあるわけです。もとからの地元の人というのはほとんどわずかしかないでしょう。ここにふるさとの森があれば、それがほんとうに憩いの場所になる。日本全体で森がなくなって行く、東村山も都市化してどんどん緑地帯がなくなって行く中で、たまたま全生園の緑化に関心のある者を集めて、まあ、大きな視野から見れば全生園なんてほんとうにゴマ粒ほどの場所だけれど、それでもやはり、それに対して、どんなに小さな声でもいいから、全生園ではこうやっているんだ、森林を破壊してはいかんのだと、そういう声を上げようじゃないかということを考えてね。

第3節 ハンセン病療養所の森の意義

草木の花や実を見たり、新緑や紅葉を眺めたり、野鳥や秋の鳴く虫の声を聞いたりすることが心を和ませることは言うまでもないであろう。木が成長するのを見守る楽しみもある。園内の盆栽会会長である石神耕太郎さんは、「4月になると毎朝4時半に起きて、盆栽の根っこを見ているのが好きで、根張りを見ていると何とも言えないです。ハンセンでここに入っているという暗い感じがないです」と語る。「慰安畑」という名称は当局の政策的匂いがするものの、畑で作物を育てることが心の安らぎになることも事実であろう。石神さんは、病気で将来に絶望していたとき聞いた広島陸軍病院の婦長さんの言葉がその後の心の支えとなったと述べている。「庭先の砂の中からチューリップが頭を上げてきたのです、4月でしたから。そしたら私を庭に連れて行って、ハンセンになっ

でも——当時はハンセンなんて言わないですが——けっしてがっかりしてはいけない、あのチューリップをご覧下さい、冬の間は土に埋もれて雪に抑えられていてもいまはあのように立派に芽が出てきてこれから人を慰めるようになる。あんたもしっかりして良く治療して、けっして自殺したり無茶なことをするんじゃない、と言われました。」所義治さんは鎮守の森を想起する。「むかしは屋敷林を切るといふときも、家を造るので木を切らせてくださいと祈った。鎮守の森とか屋敷林などは大切にされてね、子どもたちはみんなそのそばで遊んだりして育って行った。そういうことを木はみんな知っているんだね。」伊藤赤人さんはこれを〈鎮魂の森〉と呼ぶ。「やがてその苗木が大木となり／生き残った者たちも／みな森の地に還り／新しい緑の森に生まれ変わったとき／この森に生き／ハンセン病と闘い／時代の波に翻弄されながら／歴史の襞の中に消えていった／人間たちのいたことも／いつか伝説となり／森の由来を知らない／二十一世紀の市民たちの／楽しい憩いの森となっていることだろう」(『多磨』1986年8月。一節のみ)。17歳で入園した飯川春乃さんは桜の成長を見守りながら園内で年月を数えた。「桜よ／私とともにここで生きた桜よ／たくさんの人の目を楽しませておくれ／そして／全生園と私たちを語り継いでおくれ」と、「桜よ」と題する詩で訴えている(『多磨』2003年9月)。

私がハンセン病療養所の入所者に初めてお会いする機会を得たとき、その人すなわち所義治さんは同行者と私を病棟の屋上に案内し、そこから見渡せる園内の森を指して「良いでしょう」と言われた。そのとき私は、この森が入所者によって植え育てられたことや、所さんが緑化活動に積極的に関わった方だということを知らなかった。そのときはただ、森を見る所さんの嬉しそうな目と言葉だけが強烈に印象に残った。それと同時に、かつて私がドイツのベルリン近郊にあるオラニーエンブルク強制収容所の焼却炉跡を訪れたときのことが思い出された。この焼却炉で大勢のユダヤ人や反体制の人間がナチス政権によって毒殺されたあと焼かれた。そこにしばし佇んでいたとき、ふと、その焼却炉のまわりに大きな木が数本立っていることに気がついた。ここで無惨に殺された人たちはもういない。殺害者は黙して語らない。しかし、樹齢からして、ここで起きたことのいっさいをこの木々は見ているにちがいない。ナチスの強制収容所体験を綴ったフランクルの『夜と霧』(1947年)の中に、あらゆる望みが失われた状況にあってなお生きる望みを得ている婦人の話が紹介されている。彼女は収容所に生えている一本の木がこう語っているのを耳にしたというのである。「私はここにいる。私は——ここに——いる。永遠のいのちだ」と。もちろん木は何も語らず、ただそこに黙って立っているだけであろう。しかし、その沈黙の中で婦人は大いなる存在の原事実を知らされたのである。彼女の生きる力は沈黙の言葉から与えられた。ピカートは「言葉は沈黙から生まれた」と書いている(『沈黙の世界』1948年)。人間焼却炉の脇に立つ木々のそばにいと、木々の沈黙から言葉が聞こえてくるように私には思われた。

日本のハンセン病の言語を絶する過酷な歴史も、あと数十年で確実に終わり、ハンセン病療養所も廃止される。それと同時に入所者が育てた森も消えるのであろうか。この森を伐ることは、多くの人間の存在の証を消し去ることを意味する。たしかにそれは感傷にすぎないかもしれない。しかし、もしそうならば、私たちは何をもって生きて存在していると言えるのであろうか。

【参考文献】

A 著書

- 『東村山市樹木・樹林調査実態報告書』東村山市、1973年
 林芳信『回顧五十年』大西基四夫、1979年
 多磨全生園患者自治会編『俱会一処一患者が綴る全生園の七十年』一光社、1979年
 武蔵野短歌会『合同歌集 青葉の森』武蔵野短歌会、1985年
 多磨全生園入所者自治会『緑のしおり』1985年
 芳葉郁郎『むさし野怨歌』芳葉郁郎、1989年
 桜沢房義『全生今昔』三輪照峰編、1991年
 宮田正夫『闇から光』1992年
 松木 信『生まれたのは何のために ハンセン病者の手記』教文館、1993年
 大竹章『無菌地帯—らい予防法の真実とは』草土文化、1996年
 平沢保治『人生に絶望はない—ハンセン病100年のたたかい』かもがわ出版、1997年
 国本衛『生きて、ふたたび 隔離55年—ハンセン病者半生の軌跡』毎日新聞社、2000年
 全国ハンセン病療養所入所者協議会編『復権の日月—ハンセン病患者の闘いの記録』光陽出版社、2001年
 太田順一『ハンセン病療養所百年の居場所』解放出版社、2002年
 多磨全生園入所者自治会緑化委員会『みどりのオアシス全生園』2005年

B 随筆・小文等（本文中で紹介しなかったもの）

- 伊東秋雄「初夏の日誌より」『山桜』第310号、1949年7月
 小学分教室「全生園の樹木」『多磨』第430号、1960年2月
 三枝真咲「全生園の植物」『多磨』第511～523号、1964年7月～1965年7月
 T・N「一本の櫻」『多磨』第570号、1969年6月
 菊地儀一「花と小鳥と緑」『多磨』第598号、1971年10月
 氏原孝「ささやかな願い」『多磨』第650号、1976年3月
 患者自治会代表松本馨「創立七十周年に寄せて」『多磨』第692号、1979年9月
 金近保「いろいろななはなし（9）〔緑化運動〕」『多磨』第712号、1981年5月
 山下十郎「緑の散歩道」『多磨』第757号、1985年2月
 多磨全生園入所者自治会緑化委員会『園内樹木一覧』1986年4月
 グループ・はばたき「全生園の野鳥」『多磨』第839号、1991年12月
 多磨全生園入所者自治会緑化委員会『園内山野草一覧』1992年7月
 グループはばたき「全生園探鳥地・観察ポイント」『多磨』第846号、1992年7月
 鈴木禎一「武蔵野の面影を探る—野鳥の保護を願って」『多磨』第860号、1993年9月
 浅野俊雄「緑の楽園に住む有難さ」『多磨』第881号、1995年6月
 天野秋一「緑化日誌こぼれ話」『多磨』第914号、1998年3月
 河合一匡「いつの日かは全生園の杜は市民の杜に」『多磨』第960号、2002年1月

C 入所者・看護師聞き取り

- 所義治さん（2005年7月7日、12月5、9、12、20、27日、2006年1月3、11、14、21、28日、2月4、15、20日、3月2、17、28、29日、4月1、13、20日）、山下道輔さん（2005年12月12日）、萩野芳江さん（2005年12月27日）、平沢保治さん（2006年1月11日）、看護師Aさん（同年1月11日）、大竹章さん（同年1月14日）、看護師Cさん（同年1月23日）、東村山市立青葉小学校長（同年2月2日）、看護師Bさん（同年2月4日）、荒川武甲さん（同年2月15日）、石神耕太郎さん（同年2月20日）、鈴木禎一さん（同年2月28日）、志田彊さん（同年3月9日）、児島宗子さん（同年5月24、29日、6月6、17日、7月28日）、看護師Eさん（同年6月29日）、看護師Dさん（同年7月14日）、茂田美津枝さん（同年8月3日）、国本衛さん（同年8月29日）

D その他

全生園の森を題材にした療養所入所者の文芸作品や現在の森の様子については、筆者開設のホームページ <http://www11.plala.or.jp/tamast/zens.html>を参照願いたい。

【Abstract】

The woods in Tama-Zenshoen as the National Sanatorium for Hansen's disease

Takayuki SHIBATA

The patients at Tama-Zenshoen planted woods: why did they do this in spite of their disease? The Japanese policy mandated the compulsory isolation of the patients even after death. Indeed the woods themselves do not speak, they do tell us about the cruel history of the treatment of Hansen's disease patients and the hopes they had.